

共生社会の推進「できることからの積み重ねを」

2018/3/4 日曜日 陸奥新報 社説 より

多くの人を感動の渦に巻きこんだ平昌冬季五輪。その感動の第二幕が9日に開く。障害のあるトップアスリートが出場できる世界最高峰の国際競技大会、平昌パラリンピックには、日本選手団も86人(選手38人、役員ら48人)が参加し、前回のソチ大会を上回る7個以上のメダル獲得を目指す。さまざまなハンディを抱えた人たちが、創意工夫を凝らし、肉体の限界まで鍛え上げて臨む大会で見せる競技の数々は、オリンピックに勝るとも劣らないものがあり、今から開幕を楽しみにしている人も多いだろう。日本選手の活躍とともに、大会の開催を通じて障害を持つ人への理解がさらに深まるよう願っている。

障害のある人も、ない人も互いに人格と個性を尊重し合い、人々の多様な在り方を認め合える「共生社会」の実現は、一日も早く成し遂げなければならない社会全体の課題だ。だが現実には、障害者の社会参加を阻むさまざまな障壁が存在しており、さらに一層のバリアフリー化が望まれる。

そうした中、本紙の記事で感心させられたバリアフリーへの取り組みを見つけた。尾上総合高校は多くの人にストレスなくホームページを見てもらおうと、壁紙の色を変えることで色覚障害を持つ人も見やすいホームページを作成したという。情報処理などを受け持つ常勤講師の川口真史さんが、その役目を担当し、昨年4月からデザインの変更やページの更新などを積極的に行ってきた。

そのホームページが色覚障害者にも優しい仕様となったのは、障害を持つ人から「ホームページの壁紙が白いと文字が見えない」という一本の電話があったからだという。参考になるサイトがなかなか見つからないなど、初めての取り組みなだけに、悪戦苦闘だったそうだが、県外で類似の取り組みをしている団体を見つけ、その協力により、同校ホームページの壁紙を白、青、緑など6色から選べるように変更。文字を拡大できるシステムも取り入れるなど、視覚障害がある人にも見やすいものにつくり上げた。

この取り組みは、インターネットの世界でも評価され、より良いウェブサイトづくりを醸成、奨励する「日本Web大賞！」で協会チャレンジ賞に入賞した。川口さんは「見る人に飽きられず、学校らしいホームページづくりを引き続き行う。更新の方法なども変えていきたい」と、より分かりやすいホームページづくりに意欲を見せている。

社会のバリアフリー化などと言えば、大層、難儀なことのように思うが、障害のある人の言葉に耳を傾け、できることから一つ一つ積み重ねていくことで、十分、効果を上げることができる。そういう意識を持つ人が多く現れる社会づくりが共生社会実現の早道に思う。